

子どももの貧困の現実。

親の所得減少、ひとり親の増加などを背景に、深刻化する子どもの貧困。社会はこの問題をどう捉えるべきか。



日本では、6、7人に1人の子どもが貧困状態にある

将来のことなんか
考えられません

神奈川県在住の幸恵さん（仮名・十七歳）は県内にある中高一貫の進学校へ通っていた。ところが、高校入学を目前に控えた冬、不動産会社に勤めていた父親（五十二歳）が、突然リストラされ、無職に。

「それでも、父はせっかく私立に入れたんだから辞めさせるのは忍びない、といって蓄えの中から入学金と学費を工面してくれて……ただ、そんな無理も長くは続きませんでし

山川敦司

やまがわ・あつし（ルポライター）

た」

私立高校の授業料は、「高校授業料無償化・修学支援金支給制度」により、私立高校へ進学する生徒に対しても、「公立高校の授業料」に相当する月額九九〇〇円（年額一百万八八〇〇円）が支払われる。このほか、年収三五〇万円未満の低所得世帯には月額四九五〇円（年額五万九四〇〇円）が加算されている。

しかし、これはあくまでも「授業料」に対する援助。私立には設備費やPTA会費など諸経費があり、それらの支出はむろん実費だ。幸恵さんの場合も、入学金と前期授業料に加え、制服代、教科書代など合わせて一二〇万円ほどを支払うことになり、それが家計を直撃した。

「しかも、自宅から学校までは電車を三本乗り継いでいくため、学割でも一カ月の定期代が六〇〇〇円を超えてしまうのです。で、だんだん定

期代も負担になってしまっって、途中からは、朝五時起きで片道一五キロを自転車で見つけました。ただ、クラスメイトに見つかると恥ずかしいので、ひとつ隣の駅の駐輪場に自転車を止めて、徒歩で通っていました」

高一の冬からは学校で禁止されているアルバイトも始めた。高二の秋に予定されている沖縄への修学旅行費を捻出するためだ。

「自宅から自転車まで二〇分くらいにある居酒屋です。選んだ理由？ 単純にバイト代（時給九〇〇円）がよかったから。だって四泊五日で一二万円なんて、とてもじゃないけど失業中の父に出してほしいとはいえないま

せんでしたから」

リストラ後、父親は清掃のアルバイトをしながら仕事を探したが、難航。家計はさらに逼迫し、

「だんだん、お弁当のおかずが減っ

ていって、ご飯にふりかけだけが一週間続いた時には、さすがにヤバイなっって……」

弁当箱を空けた途端、そのまま蓋を閉め、トイレで食べることも度々だった。さらに、片道一五キロの自転車通学で噴き出す汗が原因で「あの子、臭くない？」と囁かれはじめる

と、それがいじめに発展。

「すれ違いざまに、臭っ！ って言われたり、授業中もあからさまに、なんだか、この教室臭くない？」って

からかわれるようになって……」

精神のバランスを崩した彼女は、食べては吐き、食べては吐きを繰り返すようになった。

「死ぬ気はないけど、リストカットして血を見るとスツとするみたいな感じ。あれと同じです。今はずいぶんよくなったけど、長い付き合いになりそうですね」

結局、幸恵さんは沖縄への修学旅行を前に高校を中退。現在はフアス

トフード店でアルバイトしながら定時制高校に通っている。

「何で自分だけがこんな目にあわなくちゃいけないのか、全然わかりません。勉強についていけないとか、学力が原因ならまだ納得できるけど……。大学には行きたいけど、今は毎日生きていくだけで精いっぱい。将来のことなんか考えられませんが。」

六、七人に一人の子どもが貧困

厚生労働省が二〇一二年七月に発表した日本の相対的貧困率は一六・七％。うち十七歳以下の子どもは貧困率は一五・七％もあり、この数字はOECD（経済協力開発機構）諸国三五カ国中九番目で、六、七人に一人が貧困ということの意味する。

「子どもの最貧国・日本」（光文社の著者で、「なくそう！子どもの貧困全国ネットワーク」の子どもの

貧困」全国ネットワークの世話人を務める山野良一（よののりょういち）千葉明德短期大学教授によれば、

「子どもの貧困の特徴は、たとえばクラブ活動ができないとか、修学旅行に行けない、あるいは卒業式に出席できないといった、ほかの子どもたちが体験できることが自分だけできないという、訳のわからない不条理さです。ただ、そうなくても子どもたちは親を責めない。その代わり、自分を責めてしまい、非行や自傷行為といった形で出てくるんです。それが子どもの貧困における最大の問題点でもあるんです」

と、指摘する。背景には働く親の所得減少などがあげられるが、「懸命に働いても賃金が安く、そのうえ雇用が不安定。それなのに働いたお金の中から税金や社会保険料を支払わなければならない、それがさらに家計を逼迫させています。ある地

方自治体では年収三〇〇万円の家庭に対し、五〇万円以上の健康保険料を徴収しているところもあり、これでは払えなくても払えるはずがない。アメリカやヨーロッパでは、貧困に仕事をしていない、ということから仕事に就けば貧困率は下がります。ところが、日本の場合はほとんど親が働いていて、失業率が高いはずで低い。にもかかわらず、これはだけ貧困率が高いのは労働単価が低いからです。反して学費については、世界の中でも最も高く、ヨーロッパではイギリスを除く多くの国が大学まですべて公立です。だから日本では多くの学生が大学の費用をつくるために、懸命に働かなくてはならない。それが彼らから学びたい、努力したいという勤勉さを失わせている元凶になっているんです」

さらに、子どもの貧困を深刻化させている要因のひとつが、ひとり親

の増加だといわれる。

「全国母子家庭世帯等調査」によると、二〇一一年の母子世帯数は一二三・八万世帯。一九九八年が九五・五万世帯だったことを考えると十数年で約一・三倍に増えたことになる。



7月に開催された「なくそう！子どもの貧困全国ネットワーク」によるセミナー

七年前に調理師の夫と離婚。現在

高校二年の息子と暮らす麻由美さん（仮名）は四十五歳のシングルマザー。仕事はスーパーパーのパート従業員で、月収は手取りで二二万円。一〇年以上勤続するが昇給はなく、正社員登用も夢のまた夢だという。

「離婚の原因は夫のDVです。調停で協議離婚し、慰謝料と養育費の額も決めたんですが、払ってくれたのは最初の半年だけ。そのあとは勤め先も辞めてしまっただけ、まったく連絡が取れなくなりました」

同時に生活のすべてが、彼女の肩に重くのしかかるようになった。

「当時息子は小学六年生。スーパーパーの仕事が終わると一度家に帰って、子どもに夕食を食べさせたあと、夜は近所のファミレスでアルバイトを掛け持ちしました。でも、月収はあわせても一五万円になるかどうか。ただ、生活保護には抵抗があったの

で、ギリギリの生活で、いつも追い詰められていましたね」

ある日のこと。息子が自転車で転倒。左足を怪我して帰ってきたことがあった。だが、

「恥ずかしい話ですが、離婚してからずっと国民健康保険を滞納していた、保険証がなかったんです。で、医者連れて行くこともできず、とりあえず水で足を冷やして、翌朝一番で学校の保健室に行かせたこともありました。幸い軽い捻挫で済みましたが、あのとさほど息子に申し訳ないと思っただけではありません」

麻由美さん同様、彼女たちの悩みが、ケガや病気のたびに支払う子ども医療費だ。

NPO法人「しんぐるまざあず・ふぉーらむ」の赤石千衣子理事長は、「二〇〇八年に子どもの無保険に対する救済法案が緊急可決され、中学生以下は一律に給付停止の除外対象

となりましたが、高校生以上は現在も適用外。各自自治体には乳幼児と、ひとり親への医療費助成制度がありますが、それは三割の自己負担分をカバーするもの。現在でも母子世帯では健康保険に加入していない世帯が全体の五・九割いるというデータがあり、現状はまだまだ深刻な状態です」

と語る。前出の全国母子世帯調査によると、日本の母子家庭の就労率は八〇・六割（二〇一一年調べ）。

「ところが、対してひとり親の貧困率は五〇・八割で、この数字は半数が貧困であるということを表しています」

けれど、実態を知らない人たちはいまだに貧困＝生活保護をもらって楽ですね、と……、本当にそれはほんでもない誤解です。母子家庭の生活保護需給率は一四割程度で、母子家庭で生活保護を受けているのは、

DV被害で疲弊しきっているお母さんや、お子さんが障害を持っていて働けないとか、あるいは自身も病気があった、本当にやむを得ないケース。実はみんなその狭間で苦勞しているんです」（赤石理事長）

低賃金のため、働けども働けども慢性的な長時間労働により、子どもと一緒に過ごす時間さえ十分に取れない母親たち。そこには脱け出したくても脱け出せない、負のスパイラルがあるのだ。

世代を超えた貧困の連鎖

そして、恐ろしいのが貧困の世代を超えた連鎖だ。

現在、ネットカフェで暮らす芳雄さん（仮名・三十歳）は、富山県出身。中学二年のときに、タクシートの運転手だった父親の会社が倒産。酒びたりになった父親は母親と芳雄さ

んを残して蒸発。母親は精神的に追い詰められ、うつ病と診断された。

「民生委員の世話になって、生活保護を受けながら生活してきたけど、クラスの奴らからはいつも、貧乏人、貧乏人」ってからかわれてさ。学校に行くのが嫌でたまらなかつた」

中学を卒業後、地元の農業高校に進学したが、悪い仲間と遊ぶようになり、一年生の三学期に中退。その後は地元でフリーターをしたあと、逃げるように故郷を後にしたのは二十歳のときだった。

「最初は名古屋にある自動車部品工場に住み込みで働いたんだ。でも、怪我をした途端にクビ。しばらくは居酒屋とか風俗店のピラ配りなんかの仕事もあったけど、結局は流れ流れて、今はこのありさまだよ」

芳雄さんは現在、新宿のネットカフェに住み、日払いのバイトを転々としながら暮らしている。

で、将来に希望あると思う？ ないでしょ……。結局貧乏人はいつまでたっても、貧乏人のまま。そこからは、脱け出せないって言うことだよ」

貧しい家庭で育った子どもが親になつたとき、その子どももまた貧困に陥る確率が高くなる——それが、親から子どもに引き継がれる「貧困の連鎖」だ。そして、それは「食べられない」「物が買えない」といった物質的な飢餓以上に、彼らの夢や将来への希望、さらに自己肯定感さえも奪っていくのだ。

子どもの貧困を個人の責任としないうで社会の問題として捉え、対策に取り組もう——、そんな機運の高まりを受け、「子どもの貧困対策推進法」が今年六月、参議院本会議で可決、成立した。今後政府は貧困家庭の当事者や支援団体などの意見を参考にしながら、大綱を作成していく予定だが、前出の山野氏は言う。

だが、そんな芳雄さんにも、かつては同棲していた二歳年上の女性がいた。ふたりは同郷で、すぐに意気投合。いい雰囲気になった。

「でもね、彼女も母子家庭育ちで俺と同じ高校中退なんだよ。俺らが一緒になつて子どもをつくったところ



「子どもの貧困対策法」を求め、デモ行進する人々
(2013年5月) ©共同

「貧困という名前がついた法律がこの国でできたという事は、画期的なこと。ただ、教育支援や生活支援に加えて、子どもたちを直接支援するためにはどうしたらいいのかを含め、課題も山積しています。本来、子どもは社会が一時的に親に託したものだ。だから困ったときには共同体がなんとかするのが当たり前でした。ところが経済優先の社会がそれを許さなくしてしまった。でも、これからの日本を担っていくのは子どもたちです。我々は、子どもたちが社会の宝だということを、改めて再認識すべきなんです」

「一億総中流」という意識により見えづらくなっていた子どもの貧困問題。だが、これは発展途上国のことではなく、間違いなく日本の中で起こっている現実なのだ。だからこそ、我々は目の前の事実から決して目を背けてはならない。